



漢詩を味わう

第78回

秋浦歌しゅうほのうた

李白

白髮三千丈

白髮 三千丈

緣愁似箇長

愁いに縁りて 箇くの似く長し

不知明鏡裏

知らず 明鏡の裏

何處得秋霜

何れの処よりか 秋霜を得たる

わが白髪はなんと三千丈。

愁いがつもりかさなつて、こんなにも長くなつてしまった。

清らかな水鏡の中にはつきりと映つた髪。

いったいどこから、この真つ白な秋の霜が降つてきたの？

《秋浦》 唐時代の池州の県名で現在の安徽省貴池県の西南一帯の地名。

《三千丈》 東京の静嘉堂文庫収蔵の宋本には千を「十」に作るが、長いことの形容。

《縁》 因と同じで原因を表す。

《似箇》 このように。唐時代の口語的な表現。

《明鏡》 はつきりと映る鏡。秋浦河の清らかな水鏡と解する。

《裏》 接尾辞で「……の中」の意。ウラではない。

「白髮三千丈」の一句で有名な秋浦歌は十七連作のなかの第十五首です。秋浦は安徽省の南部、長江の南岸にある美しい水郷地帯です。この詩は李白五十代半ばの作といわれていますが、秋浦は老境に入った李白が来遊し、秋浦歌を詠んだことよつて一躍有名な詩跡となりました。

李白は第一首の冒頭で「秋浦は、長しへに秋に似たり、蕭条として（ものわびしいさま）人をして愁へしむ」と歌い、さらに第四首では「両鬢（左右の耳ぎわの毛）秋浦に入り一朝（突如）颯として已に衰ふ」と詠んでいます。秋浦といえば万物の凋落と人生の衰えと老いを象徴し「悲しみの秋」へと人々の連想を呼び起こすこととなります。少し詳しく詩を詠んでみましょう。第一句の「白髮三千丈」は、自分の髪がすっかり白くなつて見えているのを見てしまった衝撃と感慨を、すこしユーモアを交えて表現しています。宋時代に作られた静嘉堂文庫の本には「三十丈」となっています。一丈三メートルとして九十メートルですからこれでも十分に長いのですが、その衝撃の大きさを「三千丈」と誇張して表現したところに、李白らしい飄々とした面白さがあります。一方で「さんぜん」は韻の重なる響きが美しいため、ほかの数ではこの美しさが表現できず「数字の大きさには関係ない」と解説する本があります。同じ李白の詩「廬山の瀑布を望む」の「飛流直下三千尺」も同様のことで、語調の美しさから多用される数字のようです。李白はたぶん、人々の意表を突く誇張表現に加えて、この語調の美しさも当初から意識して作詩したのだと思います。そして第二句で「愁いに縁りて 箇くの似くの長し」と、自分のこれまでの人生で経験した安史の乱による流罪や宮廷からの追放などといった悲しみによつて「こんなになつちやつた」と他人事のようにいい、最後に「この秋の霜はどこからきたの」と結びます。非常に哀愁が漂う詩ですが、その一方であまり悲壮感を感じさせない一種のとはけた味は李白ならではです。

※今月は誌上展のため、条幅月例作品はお休みです。
また誌上展の題材は慶語に限らず自由にお選びください。



新
慶



萬壽を稱し百福を資く



雲は紫台に近く龍虎の気 春は青海に回り鳳麟遊ぶ

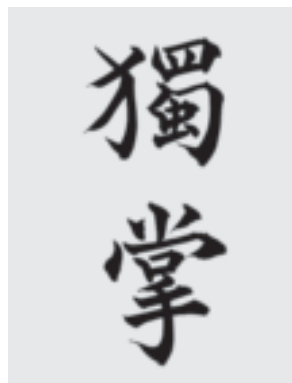
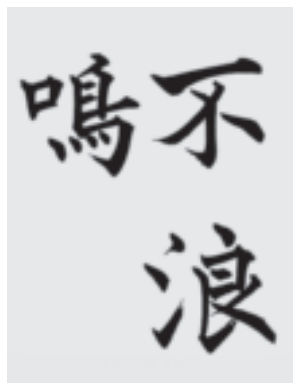
松影風を迎え舞鶴帰る



読み
獨^{どく}掌^{しょう}浪^{なみ}に鳴^ならず (一つの掌では音は出せない。「碧巖録」)
|| 類似語・孤掌難鳴

浪 獨
鳴 掌
不

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

浪鳴 獨掌不

浪鳴 獨掌不

次号課題

隸書

忘却百 年愁

獸掌不 浪鳴

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>ゆく秋の大和の国の薬師寺の 塔の上なるひとみらの雲</p>					

佐佐木 信綱

和泉 溪石 先生書



佐藤 象雲 書

音

メイホウザイジユ
ハクキシヨクジヨウ

略解

君王の徳により泰平となり吉兆の鳳凰が樹上で鳴き、
白い駒まで牧場で平穩に養われた。

史君饗後部

史君饗せるの後、部……

史晨後碑

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (14)

象雲臨

『史君饗後部』

史晨後碑は三段に分かれていて、前段は史晨の功徳を頌える銘からなり、中段は孔子廟で祭祀が盛んに行われている様子を述べています。そして今月の「史君饗せるの後」から始まる後段は、「官吏の手によって道路や建物を整備した記録を記しています。この後段から、やや字が大きくなり、また線の強弱と動きが前段より加わった印象があります。書いた時期が異なるように、特に史晨前碑とは字の落ち着きが明らかに違います。このことにより書き手が違うとする説もあるようですが、書法的には史晨前碑から一貫していて、やはり一人の書き手によって造られていると思います。



目を遊ばしめ懐おもいを騁はせ

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（16）

象雲臨

『遊目騁懷』

王羲之がこの蘭亭序を書いたのは会稽郡山陰県（現在の浙江省紹興市）の長官時代です。蘭亭において流觴曲水の雅宴を催し、清談の友四十一名が集まって詩を作りましたが、その序文に王羲之が書いたのが蘭亭序です。現在の蘭亭は宋時代に故址として造られたもので紹興市の郊外に位置していますが、実際の場所はどこだったのか不明です。また王羲之の書跡は在世中から非常に重んじられていたようですが、唐の「張懷瓘の「二王等書録」によると、書跡の収集は王羲之没後百年経った南朝時代の宋の明帝から始まり、齊・梁から随の煬帝など各王朝を通して国家規模で盛大に行われていたといえます。そして歴代皇帝のなかで最大の王羲之コレクターといわれるのが唐の太宗です。太宗は在世中に歐陽詢や褚遂良など当代の名手たちに臨書させ、また南宋時代にそれらが拡大複製され、今日蘭亭といわれるものは三百種以上あるといわれます。